

# 序

このたび羊土社から「Q&Aと症例でわかる！摂食・嚥下障害ケア」が刊行されました。この書籍の企画を相談されたのは約1年前のことでした。摂食・嚥下障害の書籍は多数出版されており、新たな書籍を刊行することにはじめはやや躊躇しました。しかし、この分野のニーズの急速な高まりや、新しい知識や技術が生まれ、それをわかりやすく伝える必要性などを考慮してお引き受けすることに致しました。

本書を企画するに当たって配慮したことはまず、①摂食・嚥下障害看護の認定看護師を編者に加えることでした。はじめに長年臨床や研究を一緒に行っている藤森まり子さんにお願いすることに決めました。藤森さんの推薦で、同じく認定看護師の白坂誉子さんにも加わっていただくこととなり、この三人と羊土社の担当者さんで編集会議を開き項目や内容を検討しました。その過程で、②全国各地で活躍している認定看護師さん達にできるだけ多く執筆してもらうという方針を立てました。さらに看護師が興味をもちやすいように、③書籍の構成をアセスメントや治療・リハビリテーションからはじめ、基礎知識などは後半にもってくることにしました。また、④具体的疾患については症例を必ず書いてもらうことに致しました。次に、⑤医師として神経疾患や嚥下の基礎に詳しい谷口洋先生に編者に加わってもらうことに致しました。⑥編者4人がそれぞれ全原稿を通読して、気になる部分を指摘すると共に専門家からのアドバイスというコーナーを設けて、意見を述べてもらうということになりました。このことで編者の思考過程が読者にも伝わると考えています。これらの編集方針に従って進められた本書は看護師の視点からみて大変親しみやすく、かつ深い内容となっています。図表も多く、症例も生き生きと書かれていて、経過がよくわかります。初心者から経験者まで大変参考になると思います。文章表現が読みやすく、論旨が明確になっているのは各編者の適切なアドバイスとともに羊土社担当者の好サポートがあったことによります。

日本は65歳以上の高齢者が人口の21%を越え、超高齢社会を迎えています。ちなみに高齢化社会とは65歳以上の高齢者が7%～14%、高齢社会は14%～21%ですが、21%の超高齢社会は世界で唯一本邦だけです。高齢者の抱える問題は非常にたくさんありますが、口から食べられなくなったとき(摂食・嚥下障害になったとき)どうするか？という問題は非常に切実です。医療が発展する前は食べられなくなったときは死ぬときでした。今では経管栄養や点滴などが普通に提供され、経口摂取ができなくても生存が可能となっています。しかし、目の前にいる患者さんは本当に経口摂取ができないのか？という判断を迫られたときに適切に答えられる医療者は多くはありません。医療の現場は混乱しているといっても過言ではありません。急性期医療は生命を救い、経口摂取ができない患者さんに対しては安全な栄養確保の手段を選択して回復期病院や在宅・施設へ送ります。そのような患者さんに対して私たち医療者は何をすべきでしょうか？患者さんの意思を尊重して、QOLや生活環境を考慮しつつ最善の医療を提供することができているのでしょうか？

摂食・嚥下障害は大変難しい問題です。医師、看護師、リハビリテーションスタッフなど関連職種が一体となって問題解決に取り組まなければなりません。解決はないかも知れませんが、より良い方向に一步でも近づく努力をしたいと思っています。本書は看護師向けとなっていますが、STをはじめとしたリハビリスタッフや医師、歯科関係者など摂食・嚥下障害を勉強する医療者のどなたが読んででも参考になると思います。皆様の臨床の一助になれば幸いです。

2013年8月

編者を代表して  
藤島 一郎